

『ゆけむり史学』第六号に寄せて

白峰 旬

『ゆけむり史学』第六号が、歴史学専攻の予算的に厳しい状況の中、このように刊行できて、うれしく思っています。昨年(2010年)の八月には、申請の結果、国立国会図書館より『ゆけむり史学』に対して、ISSN(国際標準逐次刊行物番号)が付与されました。その申請手続きに際しては、本学の附属図書館の石井保廣館長をはじめ附属図書館の職員の方にお手数をお掛け致しまして、厚く御礼を申し上げます。国会図書館への申請の際に、その規定により『ゆけむり史学』のバックナンバーはすべて国会図書館に納本していますし、これからも毎年、刊行された『ゆけむり史学』を国会図書館に納本することにしていますので、今後、『ゆけむり史学』に掲載された歴史学専攻の大学院生のそれぞれの論考が、より多くの人々の目に触れることになると思いますし、それらの論考が他の研究者の論文等に引用されるようになることを願っています。

さて、昨年三月一日におこった東日本大震災は、広範な国土に甚大な被害をもたらしました。その点では、被災者の皆様(被災者)に心よりお見舞いを申し上げますとともに、被災地(被災地)の一日も早い復興をお祈りする次第です。

この東日本大震災の影響を受けて、各地の自治体などでは過去の津波の被害を何百年前(或いは一千年以上前)にさかのぼって調べ

ている、という報道がありました。このことは、過去におこった津波の歴史を調べ、その周期を知ることが今後の津波を予測することに役立つ、ということを示しているのです。歴史を知ること(歴史)で将来を予測するという一つの方法のあらわれであると感じました。その意味では、歴史的出来事を記録することの重要性、そして、その記録を将来的に活用することの重要性をあらためて再認識させられました。

東日本大震災のもたらした大きな被害の一つとして、福島第一原子力発電所の事故の問題があります。この問題(特に放射能漏れによる汚染被害)は現在進行形で進んでいる問題ですが、この事故以前は、「原発は絶対に安全です」とキャンペーンがマスコミを通して大々的にされていて、原発の事故はおこり得ない、という印象が広く世間に持たれていました。ところが、このように大事故がおきると、原発を持つている電力会社が適切な事故対応ができなかったばかりか、国民への事故情報の開示も公明正大におこなわれず、情報の隠蔽がされているのではないかと報道されている点は周知のごとくであります。

こうした国民に対する情報の隠蔽は、かつての太平洋戦争における「大本営発表」と同じではないのかと揶揄されるように、国民に適切な情報の開示がないことが、被爆などの国民の健康被害をさらに拡大させる要因になるわけですから、その点では、「歴史は繰り返す」ということにならないように切に願う次第です。